

「読書で著者の意図を 読み取る力養って」

酒井教授
が講演

富士宮市立中央図書館主催の講演会が16日、富士宮市民文化会館で開かれた。東京大学大学院総合文化研究科教授の酒井邦嘉さんが「脳を創（つく）る紙の本」と題し、文章を作り出す人の脳の仕組みや紙の本を読むことで脳が受ける影響などについて語った。

酒井さんは脳と言語という観点から研究を進めており、「脳を創る」とは「読書を通して著者が言いたいことを考えたり、行間を読

むなど言葉の意味を補うための創造力を自然に高めたりと、思索にふけることで自分の言葉で考える力が身につく。それが脳を変化させ、成長させる」と話した。また、「研究成果の一つとして『世界各国にさまざまな言語があるが、どの言語にも共通する文法の仕組みがある』と説明した。その上で、「インターネットに流されている情報の信ぴょう性、確実性の危うさ。同一画面で文を見ることがオリジナリティがなくなっている」という電子版の文章のデメリットに対し、紙の本は「手に持っただけでその本の『厚さ』を感じ、装丁などによるオリジナリティがあることなどで、デジタル以上に本は記憶の手掛かりになる」と説明。1冊の本でさまざまな情報を一度に得ることができると指摘し、紙の本を利用する大切さなどを訴えた。

さらに、教えている学生たちが分からないことはずいぶんインターネットで検索して自分で考えることをしなくなったことや、人と顔を合わせて付き合うことがないインターネット上の付き合いばかりしていることを話しながら、「コミュニケーション能力を低下させることは、電子化の弊害の一つ」と説明。人と人が目を見て話をすることで、相手の意図に言葉の端々や表情などで気が付くことがコミュニケーション能力を向上させること、言葉聞いた話したりするほかに、書くこと

「紙の本」利用の大切さ説き

で言語能力が鍛えられることを話し、「文章は読んだ相手に自身の言いたいことが通用するかどうかが大事。創造力・想像力をつけるためにも書き手の意図を読み取る力を読書で養い、文を書いたり話したりしてほしい」と訴えていた。



講演する酒井教授